

藤代禎輔

夏目君の片鱗

夏目君の片鱗

「オイ夏目！」

これが僕の夏目君に懸けた最後の言葉となった。それは昨年一月十八日に両国国技館の春場所で偶然君を見懸けた刹那、思わず僕の口をほとばし迸り出た不用意の一語である。

時も時、折も折、この思懸けない場所で、この思懸けない無遠慮の呼声に、君も少々驚いた風であったが、僕を見ると帽を脱いで「失敬」と云った限りぎ、二の句を続つがずに志す席へと足を運ばれた。君の方では案外であつ

たに相違ないが、僕はこの日にこの場所で君を見ることを幾分期待して居った。それは君が国技館の相撲をよく見物に出掛けると云う記事が新聞に出てもいたし、前日雑司ヶ谷のK君を訪問したら、「昨日大塚が夏目君を誘って一所に来る積りで来懸きがけに寄ったら、相撲見物に行つた留守であつた相だ」と云う話を聞いて居るから、今日君を見懸けたのも別段不思議とは思わなかつた。

何時いつも東京へ出る度に一度君を訪問したいと思つて居ながら、生来の無性ぶしようが崇たたりをなして終ついにその志を果さなかつた。唯ただ一度君の近所に親類があつてその家を宿とし

て居る時、訪問したら生憎あいにく君は不在だった。その頃君は散歩の序ついでか何か僕が車でその家を出懸でかける時偶然通り合
わせたことがある。その時も話をする暇もなく別れた。
君は妙な所から僕が出たと思つたらしく、その家の標札
を眺めた。それから一度九段の能楽堂で御前能ごぜんのうがあつた
時、食堂で君に出合い、君の説を聴きに行こうと思つて
ると言つたら、君のを聞かせて呉れと云われたことがあ
る。最近数年間に於て君と顔を合わせたのはこの位のも
ので、その都度つど頗すこぶる本意ほんいない別れをしたと思つてる。
特に残念に思うのは去年の八月、鎌倉でS君に逢つた時、

京大文科から兼て夏目君に講演を頼んだのであるが、一度も実行して呉れないと云ったなら、今度君が行って懇望して見給え、多分承知するだろうと云う話しで、此次に上京したら是非その話を切出して見ようと思ひ込んで居たのに、こんな事になって仕もうたのは、実に終生の恨事である。

夏目君の話は大分新聞雑誌にも出たから、更に珍らしい種子を追加することも出来ぬが、唯僕が友人として君に交際した方面に就いて、少しく話して見たいと思う。君が英文学科に入学したのは明治廿三年であつた。帝

国大学に英文学科を設けられてから、第一期の学生は我々と同年の立花君であつた。その翌年には志望者がなくて、一年置いて君が来られた。今度英文科の新入者は大分英語に堪能で、○○先生とは英語でばかり話してる相だと云う評判であつた。その評判を裏書すると思ふ事實がある。それはその頃歴史の先生でリースと云う独逸ドイツ人があつた。この先生の英語には大抵の学生が参つて仕舞つたので、一同分り悪いにく下手な英語と極めたのであるが、夏目君はリースの英語は独逸人としては余程宜い方だと云つた。君からこの話を聞く前に僕は或る独逸人に

リリースの英語は分り悪くて困ると訴えたら、そんな筈は無い。あの人は日本へ来る前二度も英国へ研学に行つてから、英語は確かだと言われた事がある。それでも半信半疑で居たが、夏目君の話聞いてから、すると矢張やっぱり我々の耳が至らないのだと悟つた。

学生時代には君が寄宿舎の食堂へ来る都度っど我々の部屋へも立寄られたが、その頃君は制服の上へ兄さんから譲られたとか云う、スコッチの背広を着て居たことを覚えて居る。一度遊びに来ないかと誘われて、牛込喜久井町まで同行したことがある。君の部屋でどんな話をしたか

思出せないが、君が浄瑠璃にも中々名文句がある。「啼く蟬よりは中々に啼かぬ螢が身を焦がす」などは面白いじゃないかと語ったのを記憶して居る。その頃でも君は学生としては蔵書家の方で、英文学の書物が可成り書架に並んで居た様だ。

君が三年生の時、『哲学会雑誌』が『哲学雑誌』と改題して少し世間向の材料を加えようと云う方針になった。君も編輯員へんしゅういんの一人として雑録の原稿を担当して居たが、或時英国の催眠術師の記事を寄せた時、中に「豊頬細腰の人またも亦行く」と云う文句があつて同人間どうじんかんの注目

を惹いた。それから君は英文雑誌の受売うけうりを屑くずとせずして『英国詩人の天地山川に対する觀念』とか云う題で自家の研究を發表した。君が文藻ぶんそうに豊かなることは、この頃既に同学間の推賞する所と成った。

君はその後寄宿舎に入舎した相であるが、その頃僕は神經衰弱かかに罹かかった一人の従弟が、親戚の別荘で美術学校の入学試験準備中であるのを、監督がてら退舎して、其方に行つて居たから、寄宿舎時代の夏目君を全く知らない。所が君が東京を去つて松山中学へ赴任する際、早稲田の英文科に後任として出て呉れと頼まれた。僕の英語

素養は余程覚束おぼつかないもので一応は断わったが、「何に君なら屹度きつと遣れる」と云う君の一言に浮かと乗って引受けた。君も僕の英語を買被かいかぶって居たのだが、僕が君の跡釜いちごに据わろうと云うむら気を出したのは一期いちごの不覚で、僕の英書講演は散々の不成績で一学期の終りにソコソコに逃出して仕舞った。後にこの事を君に話したら「左様そうだった相だなあ」と云って君は苦笑して居た。

それから君が熊本の高等学校時代に僕を熊本へ呼ぼうとして、S君を以て交渉して来たが、その頃の僕は東京を離れる気にどうしても成れぬので、応じなかった。

明治卅三年に今の東大文科学長が専門学務局長をして居られる時、始めて高等学校教授を外国に留学せしむる一新例を開かれた。その時君と僕とが外国語研究の爲め派遣せられる事になった。君は熊本から東京へ出て、當時貴族院書記官長の職に在られた岳父の官舎に足を留めた。僕はその官舎に君を訪問したが、今度留学生となるに就いて腑に落ちない廉かどを、専門学務局長に話して来たと言った。その話の内容は何であつたか聞洩ききもらしたが、僕は唯西洋に行かれると云うことが一函に嬉しくて、腑に落ちない事も何も無かつた。君が斯こう云う際にも内に省

みて深く慮おもんばかる所があるのは、流石さすがだと感じた。この時の一行は文科の芳賀君と農科の稲垣君と陸軍軍医の戸塚君と都合五名であった。高山樗牛君も同行の筈であったが、出発間に喀血して見合わせる事になった。

仕度万端に就いて僕は或独逸人を顧問としたが、服などは向うへ渡ってから新調した方が宜よいと云うので、寄せ集め物で間に合わせたが、君は森村組の仕立てなら、何処どこへ出しても恥ずかしくない相だと云って、その通り実行した。実際君の服装が一番整うて居た。汽船だけは僕の主張が容いれられて、独逸船で行くことに極きまったが、

プロシア
普魯士軍隊式の給仕頭がしらの横暴には、一番多く折衝の局に當つた僕が少からず悩まされた。

神戸碇泊中諏訪山の中常盤で午餐をしたた認めた。その時大阪から告別に出向いた僕の妹夫婦が三歳の甥を連れて来た。一同風呂に這入った時、君がよく甥の面倒を見て呉れたことを今でも妹は感謝して居る。その晩当時湊川神社の宮司であつた芳賀君の嚴父に晩餐に招かれ、灘酒の風味にじょうこれん上戸連は羽目を外したが、酒を嗜まぬ君には多少迷惑であつたらう。

一行中馬鹿に飯の好きな人があつて、いよいよ愈長崎が日本

料理の食納めだと云うので、向陽亭に上って、風呂上りの浴衣姿と云う日本独特の快味を飽くまで貪ぼった。長崎湾口を出る時、丁度上海から入港して来たハムブルク号から、夕暗の空を破って「君が代」の曲が聞える。我^{わが}プロイセン号の音楽隊は独逸国歌を以て之^{これ}に酬いた。独逸国歌と英吉利国歌とは全然同一の曲であるから、英文学専攻の夏目君も会心の笑^{えみ}を湛えたに相違ない。横浜埠頭を離れる際には、恰^{あたか}も人込み来^まった仏国汽船に敬意を表する為め、我プロイセン号は馬耳塞^{マルセイエーズ}の曲を奏した。こう云う風に日英仏独の四国は音楽の微妙なる力によ

り、握手交歓してゐる体で、我々は世界が一家に成つた様な気分になれた。

上海の見物を済ませて本船に歸つた頃、颱風の襲来に遭い、船を呉淞河口ウースンに留めて風伯の本隊を遣り過したが、発船後も余波は中々強かつた。一行中芳賀君一人は剛の者で毫ごうも船に酔わない。その他は皆似たり寄よったりの弱虫達であつたが。中で夏目君が一番弱かつた。その頃から胃弱病に罹つて居たのではあるまいか。颱風後の航海では芳賀君が面の憎い程船に強くて、今日は食堂に出る人が少ないから、ウント食つて遣つたと云う様に、自慢話

をする。我々は枕も上らぬ病人の様に床上に呻吟して、部屋ボーイに一品二品を枕頭に運ばせ命を繋いで居るのである。ドンナに威張られても一言も無い。海の上では迎^{とて}も敵わないから陸で讐を取って遣れと心窃^{ひそ}かに思い定めた。香港でピークに登った時この機逸すべからずと、トウトウ頂上まで引張り上げた。夏目君は学生時代に文科には珍らしい機械体操の名人であつたから、この位の山を登るのは朝飯前だ。他の二人揃いも揃つた青瓢箪ではあるが、目方が軽いだけに何の事はなかつた。独^{ひとり}芳賀君は一橋時代に豚と異名を授けられた程だから、途中で

弱音を出して幾度か下山を主張したが、僕は委細構わず
 ピークの絶巔まで漕ぎ付けた。併し頂上からの眺めは亦
 一段の絶景で、芳賀君も淋漓たる流汗を十分償うて余り
 あつたことと僕は確信して居る。

古倫母コロムボでうるさく、附纏つきまとう乞丐こじきの子供に、君が態々わざわざりようがえ両換
 した小銭を振撒いても、猶執なおしゆうね念く附いて来るので、辛
 抱強い君がステッキを揚げた姿は、今に目に残っている
 様だ。

船中では書生時代の気分に戻つて、お互に擲揄やゆした
 り、悪口を言合つたりしたこともあるが、総体君は求め

ずして自おのずから上品な紳士の態度を得て居た。上海からは英米の宣教師が妻子眷属を引連れ二十名余り乗船した。何れも風采いずから見ると、迎とても人を感化する力は無さ相に思われたが、中には可なり職務に忠実な向むきもあつて、熱心に伝道を試みる。夏目君はその一人に見込まれて、神の存在と云う様な問題で、哲学的見地から対あいて手を手古擦ずらしたこともある。或時僕は君と文学の話をした中に、君は今迄和漢洋の文学を研究して居るが、何一つ是れが分つたと思ふものは無い。唯俳句のみはその趣味を解し得た様に思うと云つたことがある。君が漱石と云う号で

日本新聞やら、雑誌『ホトトギス』に俳句を寄せると云う噂はその前から聞いて居たが、その方面の注意を全然怠って居た僕は、君がそれ程造詣の深いことは知らなかつた。船中からも君は東京の根岸で病を養って居る子規氏へ折々句を贈った様である。

古倫母コロンボから亞丁アデンまでの航海が一番長いので、一行は渡欧後の準備として独逸語やら仏蘭西語フランスやらの俄勉強にわかに取懸ったが、君は英文小説の耽読一点張りであつた。

以太利イタリーに着く前に一行間の問題となつたのは、当時巴里パリに万国博覧会があつて、ジェノアから巴里へ行けば間

に合う。それとも博覧会を断念してナポリで上陸しポンペイを見て羅馬ローマに行こうかと云うのであった。出発前東京で坪井先生に旅行中の心得を承うけたまわった時、巴里の博覧会などは、赤毛布あかゲツトの奥山見物と同然だ。それよりはナポリで上陸して、ポンペイ、ペスツムを見物し、羅馬で一週間位滞在した方が、遥かに気が利いてると云われた。所が一行中の多数は以太利は留学中でも行かれるが、博覧会は今度でなければ見られないと云うので、巴里行に決した。留学期中以太利へ行き損った僕は、あの時坪井先生の忠告に従えば宜かったと後悔してる。併しかし夏目君

は以太利観光に熱心と云う訳でもなし、博覧会も強いて見たいと云う風でも無かつたらしい。唯目的地の倫敦^{ロンドン}へ行くには巴里を経由するが一番便利である。そこで初めからその積りで巴里でも二、三の人に面会する予定だつたらしい。けれども若^もし一行の多数意見が以太利見物に傾いたら、夫^それにも反対を唱えなかつたらうと思われる。兎^とに角^{かく}君は航海中始終超然主義とでも云う様な態度を執つて居た。

ナポリ碇泊中にも敏^{びん}捷^{しょう}な船客はポンペイの見物を済ました人もあるが、我々は不慣れのことではあり、以太

利案内者の乞食根性に就いては随分警戒を加えられて居るから、市内の見物だけで船に還った。ジェノアで船を乗捨ててモン・セニのずいどう隧道を夜間に通過して巴里に着いた。大博覧会は二日程見物したらいやけ厭気がさして、ルウブルも見ず、グラントペラも覗かず倫敦へ渡る夏目君と扶を分つて他の四人は伯林ベルリンへと志したのである。

程経て伯林の或る料理店から数名の日本人連署の絵葉書を夏目君に贈ったら、「君達はにぎや賑かで羨ましいね。僕は一人ポツチで淋しい」と云う意味の返事が来た。その後「巴里で懐郷病の講釈を谷本君から聴かされたが、

この頃になって成程と思当ることがある」と云う様な手紙もあつた。「一度賑かな我々の方へ遣やって来ないか」と言送つたら、「大陸へ渡る気分にはなれない」と云う挨拶だつた。

立花の銑せんさんが病気で帰朝するとき、君は常陸丸へ尋ねて行って、「銑さんは可哀相だ、実に気の毒だ」と云う文通があつた。その頃既に「縁起の悪い船」と云う評判を立てられた常陸丸が香港を離れると間もなく銑さんは船中で瞑目したのである。銑さんは帰朝の航海中芳賀君へ宛てた書信の都つど度、俳句めいたものを書送つたが、

倫敦碇泊中の端書はがきに「戦争で日本負けよと夏目云ひ」と云う一句があつた。憂国の士を以つて自ら任じ、人からも許された同君と常陸丸の船室で夏目君が会見した折りに、倫敦辺に迂路うろつ付いて居る、片々たる日本の軽薄才子の言動に嘔吐を催おして居た君が、この奇矯の言を吐いた光景が目に見える様である。

我々の留学は満二年の期限であつた。その期の満つる一ヶ月程前に「夏目ヲ保護シテ帰朝セラルベシ」と云う電命が僕に伝えられた。これは君の精神に異状があると云うことが大袈裟に当局者の耳に響いた為めである。そ

れでなくても僕は無論同船して帰朝する積りで、その前に君と打合せを仕て置いた。所が倫敦へ着くなり郵船会社の支店へ行くと、事務員が「夏目さんは一度乗船を申込んで置きながらお断りになりました」とさも不平らしく訴える。「若し同船して帰ると云たら船室の都合は附きますか」と聞いたら、「それはどうにかありません」と云う返答だ。そこで夏目君に端書を出したら翌朝僕の下宿へ来て呉れた。君より前に来て居たO君は、例の電報を取次いだ関係で、是非一所に連れて帰れ、荷物の始末は跡でどうにでも付ける。ああいう電報のあった以上

若しもの事があつたら君は申訳はあるまいと熱心に同行を主張する。兎に角同行を勧めて見ようと答えて置いて、その日は夏目君とナシヨナル、ギアレリーを一所に見て、午餐を共にし、それから君の下宿に一泊した。君が帰朝を後おくらせることになつたのは、蘇スコットランド格蘭へ旅行して、予定よりも長逗留をし、荷物が出来ない為めだ。そこで荷造りは人に頼んで体だけ僕と一所に帰つたらどうかと再三勧めて見たが、どうしても応じない。成る程君の部屋には留学生としてはよくもこんなに買集めたと思う程書籍が多い。これを見捨てて他人に後始末を任せる

と云うことは僕にしても出来相もない。それに今日一日見た様子では別段心配する程の事もないらしい。この上無益な勧告を試みるでもない。僕は断念した。その翌日君にケンジントン博物館と図書館を案内して貰い、図書館のグリル・ルームで一片の焼肉でエールを飲んだ。

「モウ船までは送って行かないよ」と云う言葉を最後に別れた。

君は僕より二夕船後れて明治卅六年の正月帰朝した。それから後の消息は新聞やら雑誌やらに、委敷くわしく出て居るから一切省略する。思えば我々一行五人の内戸塚君は数

年前物故した。芳賀君と稲垣君とは目下再度外遊中である。すると今日本に残って居る者は僕一人である。君が人物を評し君が作物さくぶつを論ずる適任者は世上その人に乏しくあるまい。唯あの長途の旅行を共にした一人として、僕は適不適を顧みるいとま違いとまなくこの一篇を綴って見たのである。

（『芸文』第八年第二号（大正六年二月））

日本文学電子図書館

夏目君の片鱗

著 者：藤代禎輔

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館